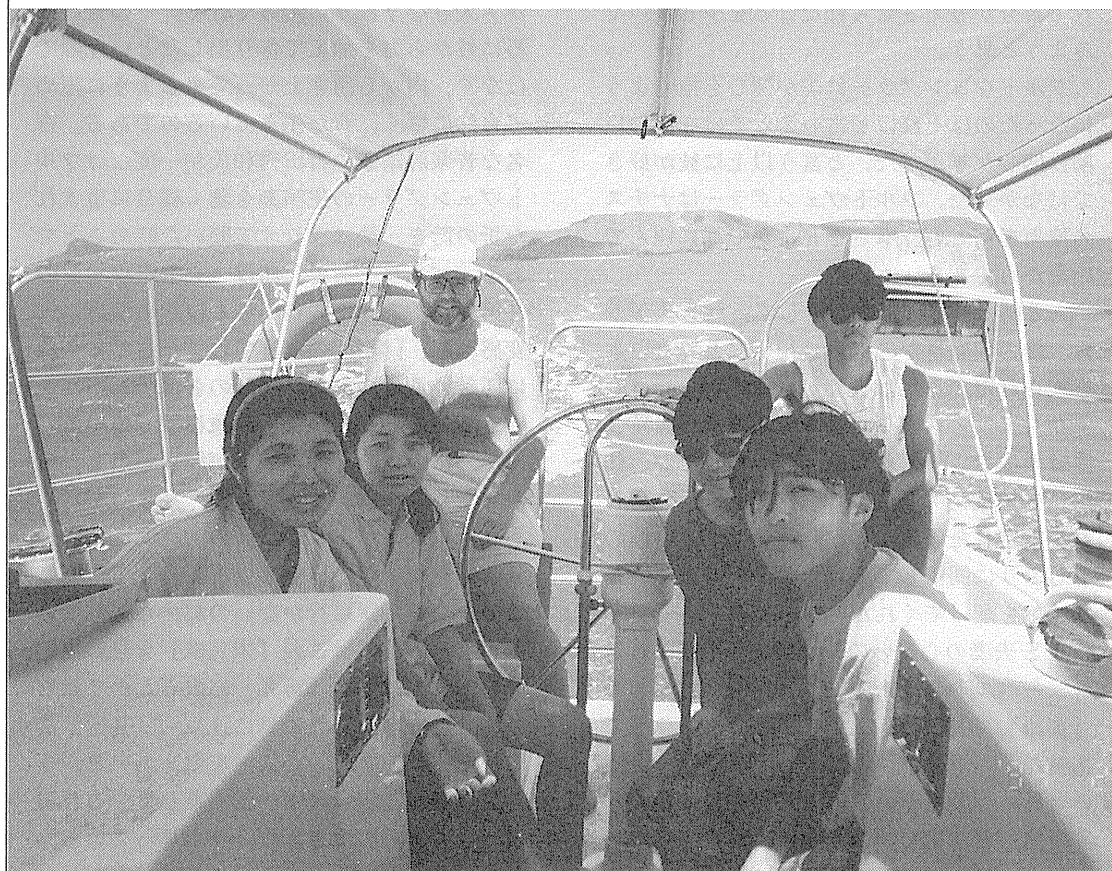


北里大学教養図書館

閲覧ニュース

75号

1995. 4



フルトヴェングラーを聴いて

手塚 甫

表題に掲げたフルトヴェングラーとは、言うまでもなく、あの指揮者として、そして作曲家としても有名な人物のことである。彼の演奏は多くの録音が残されており、その音楽についても多くの人が語っていて、今更付け加えるものはない。況んや門外漢が口を挟む余地など全くない。ここでは、彼の音楽に触れて自分が考えさせられたことを少し書いてみようと思う。

フルトヴェングラーに僕が関心を抱くようになったのはそれほど古いことではない。以前は関心が無かった、と言う以上に彼が好きではなかった。フルトヴェングラーはナチスの協力者だという噂をどこかで耳に挟んでいたからである。

ある時、当時大変親しくしていたS夫妻から、僕の何回目かの誕生日祝いにとカセットを贈られた。それは夫妻が持っているレコードからダビングしたものであった。当時、僕は学生で、一人暮らしをしていたのだが、偶然に知り合ったSさんは腕のいい漆塗師として安定した収入があり、貧乏で佻しい僕の暮らしぶりに同情してくれたのか、なにくれとなく気を配ってくれた。このカセットもそういうS夫妻の心遣いの一つであった。それはシューベルトの「未完成」とベートヴェンの「英雄」、指揮は共にフルトヴェングラーであった。いつもながらのS夫妻の好意を有難いと思い、早速そのカセットを聴いてみた。実を言うと、はじめのうちは少々高を括っていた。S夫妻の気配りに感謝しながらも、心の隅に「月並」という言葉がよぎったのを偽る訳には行かない。フルトヴェングラーというSさんでも知っているほどの名前、という風に受け取ったのであろうと今にして思う。カセットに耳を傾けながら「おや」と思った。これはとても月並などというものではない。

ラジカセ、それも当時僕が持っていたのは出はじめの頃のもので今日のものの比ではないのだが、そこから響いてくる音が隅々まで息づいているような音楽にとうとう僕はすっかり引きこまれてしまった。「未完成」の出の所、いつ演奏が始まったと気づかないほどの音がやがて緻密に重なりあい、高まりあいながら大きなうねりへと変って行く。その音は楽器に外から力を加えて作り出したというのではなく、内から湧き上がって来るように極めて自然に響く。音が生きているのである。有名な音楽評論家の吉田秀和氏が一度だけフルトヴェングラーの生演奏を聴く機会に恵まれた折の話を、後にラジオで聞いた時のことである。パイロイトで、曲はベートヴェンの「第九」であった。吉田さんはこの演奏に大変感動し、「第九」の演奏では、今もってこれに匹敵するものがないほどの名演であったという話であった。中でも印象に残っているのはその出の所で、何時演奏が始まったとも分からないように音が出はじめ、高まって行く。あれはフルトヴェングラーの大発明で、あまりに鮮やかなので、他の指揮者はとても同じことを真似る訳に行かないのだ、と語っていたが、その時僕はこの「未完成」を思い出し、そのやり方は何も「第九」に限ることではないのではないかそれに単に技術的「発明」なのだろうか、と思ったことを憶えている。そして「英雄」。細い説明は措くとして、これは僕が「英雄」の決定版だと今も思っているものである。素晴しかった。この曲は、だれが指揮しても、聴いたあとと高揚した気分になるものだが、フルトヴェングラーの場合はそれだけではない、演奏後、興奮がまだ収らない中、快い疲労を感じながら上気しているような楽員一人一人の姿が浮かんで来たのである。普通、オーケストラが曲を演奏し了えた直後

というものは、指揮者ばかりが滴るような汗をいかにも疲れ切った表情で拭うというようなシーンを目にするのだが、この「英雄」はそうではない。その興奮と疲れを楽団員も共有している。いや正確に言えば、共有しているように、その時僕は感じたのである。なにしろカセットで聞いていたのだから姿なぞ見えるはずがない。それほどに指揮者と楽団員が一体となって音楽の世界を創り上げていたのである。指揮者がどれほどの思いこめ、細心の注意を払ったとしても、楽員が指揮者の指示に従っているだけでは決してこういう響きは出て来ないのではないのか。演じる者一人一人が指揮者の意図をよく理解し、それを我がものとした上で、演奏の場で指揮者と音を出す者との気持ちが互に響き合っているでなければ、これほど内から湧き上って来るような、力を持った音の響きにはならない、と思った。フルトヴェングラーの指揮は、自分が考えているように音を出せと命じるのではない。自分の意図を楽員と共有しつつ、両者が協同して音楽を創り上げて行くのである。僕のこの見方が正しいかどうか分からない。専門家から見れば、門外漢の陳腐な独り善がりなのかも知れない。でも、この時、僕がこのように思ったことだけは確かである。フルトヴェングラーという人はそういう人だったのか、と意外な感に打たれた。そしてすぐに、こういう人がどうしてナチスに従ったのだろうか不思議に思った。そこで今度はフルトヴェングラーという人をもっと知りたくなくて、彼に関する本を読み漁った。中でもクルト・リース著「フルトヴェングラーその音楽と政治」(みすず書房)からは多くのことを学んだ。例えば、彼が亡命せずにドイツに留まったのはナチに従った結果ではなく、逆にナチから音楽を守るためであったこと、ナチ全盛期にもユダヤ人作曲家の作品を演奏会で積極的にとりあげただけではなく、ベルリン・フィルの楽員の他にも多くのユダヤ人音楽家をナチから守ったこと、そしてなにより、ヒトラー

が臨席した演奏会で、慣例となっていたヒトラーに「ドイツ式敬礼」をすることを彼は断固として拒否したこと等を知った。この本の著者が「お前は、自分のための人間ではあり得ない。ただ他人のためにのみ人間であることが許されているのだ」という、聾疾のベートヴェンの言葉を引用して、「同様のことがフルトヴェングラーにもあて嵌まったのである。」と結んでいる言葉に深く共感した。そして、やっとこの時になって巷の噂を軽信して本当のことを知ろうとしなかった自分に気づいた。尤も、噂を信じたのには理由が無いわけではない。1948年、シカゴのオーケストラからフルトヴェングラーが招かれようとした時、トスカニーニ以下アメリカにいるほとんどの音楽家が、亡命せずにドイツに留まった彼をナチ協力者だとして挙って反対したことがあったのである。そういう空気の中で、ワルターとメニューインだけは彼を支持したという。二人ともユダヤ系だが、メニューインの場合、フルトヴェングラーとはその時まで全く面識もない。噂さも耳にしていたが、「フルトヴェングラーのレコードを何枚か聞いて深い感銘を受け」「この人がナチである筈がない」と考えて、自分で調べはじめてその確信を高めて行った(前掲書250頁)のである。このエピソードを知って以来、僕はメニューインもとても好きになった。これらのことを通して僕がもう一つ気付かされたことがあった。それは、カセットをS夫妻から受けとった時の自分の気持ちである。漆塗師だからと、かりそめにもSさんの耳を軽んじようとした自分の高慢さである。本当に恥ずかしい。Sさんは自分が聴いてみていいと思ったからこそ贈ってくれたのだということが、やっと分かったのである。自分で確かめることの大事さが、口でいうほど易しいことでないことを思い知らされたのである。

その音楽だけでなく、フルトヴェングラーは、僕に実に多くのことを教えてくれた。

(教養図書館長)

『ワイルド・スワン』（ユン・チアン著）を読んで

正田 庄次郎

今年は戦後50年になるが、正月早々の新聞は、日本人の「戦後50年の常識」について調べたある研究所の調査結果を伝えている。それは、都内の15才から49才までの人、400人に尋ねた結果であるが、「その戦争で、アメリカは日本の味方だった」と答えた人が約1割、「その戦争の時、日本は連合軍に属していた」と答えた人が約2割、「戦後、幸いにして日本は占領されなかった」が3割を超え、「その戦争の時、日本軍の一部は中国にいた」事を否定する者が約2割であったという。

半世紀を経過するということはそういうことだ、ではすまされない気がする。そういう新聞もどうであったか。いまから4年前、1991年には真珠湾攻撃50周年の記事であふれた。アメリカで大がかりな記念行事が重なったからである。しかし、1991年は同時に、日本が破滅に向って走り出した中国侵略「15年戦争」

（正確には14年）の発端となった満州事変の60周年に当る年でもあったが、これは殆んど無視された。「こんどの戦争のおかげでアジアの国々には解放された」といった閣僚発言は論外としても、われわれ日本人は、アメリカに軍事的に敗れた印象だけが記憶に強く刻まれ、日本がアジアの国々に対して何をしてきたのかという点がアイマイなままにこの50年をすごしてしまったように思う。

ロンドンに住む張戎（チアン・ユン）が『ワイルド・スワン』をイギリスで出版したのは1991年秋であった。またたく間にベストセラーとなり、いくつかの賞をとり、各国語に翻訳されて、世界中の人びとに感動の輪を広げていった。日本では土屋京子さんが翻訳して1993年1月に出版された。上下2巻767頁というボリュームにもかかわらず、ベストセ

ラーの仲間入りをして、いまでも本屋の店頭にうず高くつまれている。私も、発売されるとすぐに、教養図書館にいれてもらい、学生にも読むようにすすめてきたが、調べてみたら今までに貸出しをうけた学生は僅か3名であった。なんともさびしい限りである。

さて、張戎（チアン・ユン）は、四川省の留学生第1号として1978年にイギリスに渡り（本は留学に飛び立つ所でおわる）、そのまま中国に帰らずに英国で暮すことになる。その彼女を1988年に母が訪ね、はじめて母と祖母の時代を彼女に語った。これが執筆の動機となった。すぐれた観察力と記憶力によって、祖母と母、そして彼女自身の体験のたぐいまれな語り手として、20世紀初頭の清朝滅亡から毛沢東の死によって狂気の文化大革命が終わる1970年代後半までの大動乱の時代を鮮やかにえがきだしている。時代のすさまじい真実の数かずがわれわれの心をゆさぶるだけでなく、中国民衆の、およそ想像をこえた苦悩と絶望、そして希望を通して、人間の本質に迫る著者の姿勢がわれわれの感動を深いもの にしている。

著者が祖母の生涯から語り始めていることは興味ぶかい。家族ぐるみの文化大革命時代の受難の歴史を経て、著者は、社会主義の祖国を「これを天国と呼ぶなら、何を地獄と言うのか」というまでに現体制への批判を強めるが、現在の中国が成立する1949年10月以前の古い中国を見る目もそれ以上にきびしい。

祖母が纏足（てんそく）した小さな足をもち、25才年の離れた北京北洋軍閥の警視總監をつとめた將軍の姨太太（日本でいう妾）であったことに古い中国が象徴されている。纏足した女性のおぼつかない足どりが、余計に

男性を刺激するというので、それは花嫁の条件であった。こうした女性の非人間的境遇は、当時の民衆の無権利と残酷な境遇の一部にすぎない。清朝が崩壊した1911年以後も、広大な中国は地方毎に軍閥が割拠し、権力は完全に腐敗しきっていた。こうした状況をさらに苛酷なものにしたのが、日本を先頭にした外国勢力の中国侵略であった。著者は日本の読者にあてた序文で、母と親しかった田中という日本人の先生だけが蛮行が支配した時代に、国籍のちがいをこえて人間だと確信させてくれた人として彼女に感謝と尊敬の気持ちをあらわしているが、その田中先生にまつわる話とはつぎのようなものである。

それは著者の母の体験であった。日本が中国侵略を大々的に開始した満州事変の年（1931）に母は生まれた。著者のえがく「満州国」の実態は、われわれ日本人の幻想をあとかたもなく砕くほどのものである。満州国は日本がでっちあげたかいらい国家だという知識はもっていても、そこで支配されていた中国の民衆の絶望的状况について、初歩的な事実さえ知らないというのが私をふくめた日本人の平均的姿だとおもう。エピソードはこの時代のことである。女学校の生徒であった母の友人が発禁の中国人作家の本を手にいれ、倉庫にかくれて読みふけている所を日本兵につかまった。不幸にもそれが武器庫であったために捕らえられ、生徒全員と近所の住民を集めた空地で銃殺された。著者はこう書いている。

「だれかの押し殺した嗚咽が聞こえた。田中先生だった。田中先生は若い女教師で、母は田中先生が好きだった。即座に「ロバ」（日本人校長のあだ名）が気づき、田中先生をぶん殴り、蹴りあげた。田中先生は雪の上に倒れ、「ロバ」の長靴を避けようとして身をよじった。「ロバ」はすごい形相で、なおも田中先生を蹴りつけた。貴様は大和民族を裏切ったんだぞ、とわめきちらしながら。ようやく攻撃をやめた「ロバ」は視線を上げて生徒をにらみつけ、大声で行進の号令を発した。」

著者は、読者に臨場感をさそうほどにリアルに残酷な時代を描写するが、それだけになお、そうした状況の中で強い光を放つ崇高な人間性を見逃していない。

私はこれを読んで、31年間首相をつとめたアジアの指導者リー・クアンユー氏（シンガポール上級相）の話の思いだした。かれは日本のシンガポール占領当時の恐怖を「シンガポールが中世に、暗黒の時代に戻ってしまったようでした」といってその体験をつぎのように語っている。

「日本軍の侵攻から二、三日後に、彼らは切り落とした首、人間の首を、木のくいや横木にのせて、シンガポールの大きな七、八カ所の橋の上でさらしものにしました。首には漢字の札が下げられ、悪いことをすれば、同じように処刑される、と書かれていた。また、日本兵の歩哨が、将校の車が通過する際、敬礼が遅かったというだけで、将校が車をわざわざ戻し、兵隊を平手打ちにし、空中に投げて、道路にたたきつけるのを見ました。私は、これは異なる文化だ。組織的な残虐性を信奉する、異なる人々なのだ、と結論しました。」

リー・クアンユー氏の「組織的な残虐性」の一言は、われわれの胸につきささるものがある。当時の歴史認識の問題にふれ、「他のアジアの国々では何が起こったかに、全く疑問はないのです」と語り、暗に日本人が戦後50年全く知らないできていることの問題にふれている。

抗日戦争を通じて、それまでの政府と同様に腐敗し、民衆の信頼を失っていった蒋介石の国民党と、それと対照的に中国の長い悪習を断ち切った、禁欲的倫理的で規律正しい中国共産党とその軍隊が、農民を中心とする民衆の支持を獲得してゆく過程を著者は冷静にえがいている。

のちに共産党の高級幹部になる著者の父は、中国に生れたこのような新しいタイプの人間であった。延安時代には、「愚かと思われるまでに無私の心を持つ」ことをねがって王愚と

自分を名づけたほどである。解放後、高級幹部として活動するようになって、公私の混同を許さず、母でさえ父を冷酷とみるほどに家族と縁者の特権を許さなかった。それは「古い中国」の悪習であったからだ。

こうした父と、同じく新しい中国で生まれ変わった共産党幹部の母、そして「父よりも母よりも、毛主席が好き」な著者に、一転して狂気の時代がおとずれる。文化大革命の時代である。この本の後半部分は、文化大革命の時代のすさまじさと、そこに生きた人間の赤裸裸な姿の克明な記録にあてられている。この紙面もつきたので、内容は本を読んでもらうことにして、この部分を読んだ感想だけを書こう。

一つは、歴史の見方についてである。混乱するロシアからの情報の中には、革命(1917)はほとんどない誤りで、ツァーの時代からやり直すのが正しいような声までが伝わってくる。革命の時代を生きた人はすでに無い。当然、革命の変質と権力のフハイが生んだ受難の体験から、過去のすべてを否定する傾向に走ることになる。この点で「ワイルド・スワン」における狂気の文化大革命の記録はこれとかなりちがう。耐えがたい苦しみを味わう母を支えたものは、「古い中国に生きた自分の母の苦しみよりは、はるかにましだ」というおもいであったとつぎのようにいっている。

「外国軍隊による占領もない。内戦もない。飢饉も、匪賊も、インフレも、すべて過去のもののように思われた。中国人の夢だった政情の安定がようやく実現した。それがあったから、母のような苦境に置かれた多くの人々も、共産主義に対する信頼を捨てなかったのである。」

歴史の評価には、その時代に生きた人々の熱い心と、後代に生きる者の醒めた目が必要だといわれる。現状を鋭く告発する著者が伝える現代に生きる中国の人々の「熱い心」を正確に読みとる必要がある。これは、反共の嵐の中で生き続けているキューバやベトナムの民衆の心を理解することにも通じるであら

う。シベリア出兵によってロシア革命に列国と共に干渉し、生まれたての弱い政権に極度の緊張と脅迫観念をうえつけた過去をもち、また古い中国の苦難の直接の加害者であった日本人として、われわれは、短絡的な結論を出すことに慎重でなければならないことをこの本から学んだ。

もう一つ感じた事は、文化大革命の狂気を生んだ元凶は、共産党員でも共産党組織でもなく（これらは解体され批判の対象となった）、解放され、平等になった民衆の、苦難の歴史の中で刻まれたうらみ、ねたみ、しつとといった人間の醜い、原始的感情であり、それが毛沢東の名をかりて暴発したものであった事を知った驚きである。地主、軍人、国民党の役人、知識人といった家に生れたという、出自そのものが罪とされ罵倒されるということは、民衆の復しゅう以外の何ものでもない。

解放された民衆自身が、恐怖と専制を生みだす時代にわれわれは生きているのだということを実感する。世界中至るところでの殺しあいを見ても、これは明らかであろう。南アフリカのマンデラ大統領は、そうした事態にならないために全力をつくしているのであり、その成否に、南アフリカを舞台にした黒人と白人の和解の成否がかかっている。人間の醜さが極限にまであらわになった現代において、なお人間の美しさ、尊厳を信じることができるか、この本は読者に問いかけている。

(経済学)

『ワイルド・スワン』 上下巻

ユン・チアン著 土屋京子訳

講談社 1993年刊

原書名：Wild Swans.

(926/C33/1-2)

講義用参考文献コーナーにあります。

複写機利用方法について

図書館では、複写サービスをプリペイドカード方式により行っております。このカードは、相模原キャンパス内の図書館ならどこでも利用できます。尚、販売は各図書館カウンターで行っております。

〈共通プリペイドカード料金〉

コピー 35枚分 500円

70枚分 1,000円

350枚分 5,000円

(一枚あたり約15円です)

「講義用参考文献コーナー」と

「ゼミ指定図書コーナー」

教養図書館では、講義の理解に役立つ参考書、テキスト等を購入して皆さんの利用の便宜を計っております。図書館2階にそれぞれのコーナーがあります。利用方法は、一般図書と同様です。大いに活用してください。

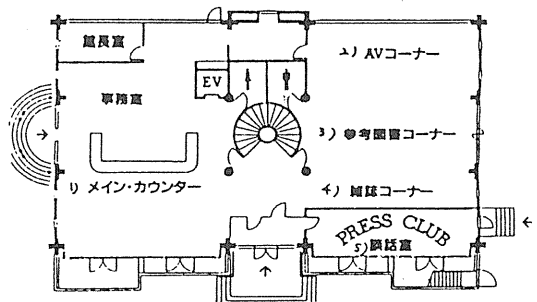
「雑誌コーナー」について

図書館1階雑誌コーナーには、新着雑誌がタイトル順に並んでいます。雑誌架の扉を開けるとその年のバックナンバーが入っています。1年分がまとまると製本されて地下の電動書架に並べられます。雑誌の貸出期間は、最新号がオーバー・ナイト貸出、その他のものが一週間です。又、北里大学図書館でどのような雑誌を所蔵しているかを知りたい方は『北里大学学術雑誌総合目録』をご利用下さい。

1階目録ケースの上にあります。

図書館のご案内 1F

皆さん図書館の中をご存知ですか？
配置を覚えて上手に図書館を利用してみたいかがですか。今号では1階をご案内致しましょう。



1) メイン・カウンター

本の貸出しをはじめ図書館の利用案内等を行っています。わからないことは何でもご相談下さい。

2) AV コーナー

ビデオ・CD・LD等のAV資料が図書館の中で自由に利用できます。

3) 参考図書コーナー

百科辞典をはじめ年鑑・索引類の参考図書があります。貸出しはできません。

4) 雑誌コーナー

和・洋合わせて1473タイトルを所蔵しています。

5) 談話室

朝日・日経をはじめ全国紙、専門紙が備えてあります。皆さんのくつろぎの場になっているようです。

郷愁の詩人

伊藤幸子

花いばら故郷の路に似たるかな

與謝蕪村の生まれ故郷は大坂近郊の摂津国東成郡毛馬村であるが、十七、八歳の頃故あって出家して故郷を離れ、“鶏が鳴く東のかたに多くの春秋を”送った。どうやら村長をつとめていた生家が破産し、一家離散の憂き目を見たということだったらしい。蕪村少年は江戸に下ると、夜半亭宋阿という俳人に入門してその内弟子になった。幼い頃から好きだった絵の勉強に加えて俳諧の修行も始めたわけだが、宰鳥と号していた二十七歳の時に師の宋阿が亡くなり、^{ねぐら}塹を失った彼は江戸を去って、下総国結城に同門の友人を頼って身を寄せ、寺の襖絵などを描いて口糊をしのぎながら、日夜俳諧に遊ぶ生活を送ることになる。

この結城時代に二十九歳を迎えた年、彼は最初の自撰歳旦帖を編集刊行するにあたって、初めて〈蕪村〉の号を用いた。以後終生変えることのなかったこの号は、陶淵明の「帰去来の辞」の有名な一節、「帰りなんいざ、田園まさに蕪れなんとす。なんぞ帰らざる。」からとったものである。蕪村とは荒蕪の村、すなわち荒れ果てた村のことであり、彼の故郷が遠い滅亡の彼方にあったことと関係があると言われる。幼い日に母を失い、さらに父の家も潰滅した蕪村には陶淵明とは違って帰るべき故郷がなかった。蕪村という号は故郷の村を失った彼の〈^{ほろ}喪び〉のしるしであり、この喪失の哀しみと亡き父母への思慕は終生彼について廻り、郷愁溢れる美しい詩句の数々を生み出させる源となった。

青年期の蕪村は、結城を拠点として関東一帯から東北の隅々にまで足を伸ばし、十年におよぶ遍歴修行の年月を送っている。この間、「重荷持ち^{よぼろみ}丁身を泣く夏野哉」、「宿かさぬ灯

影や雪の家つづき」等、幾つかの旅の句からも窺われるように、路の難儀、寒暑の苦痛、飢え、孤独、時には生命の危険まで、およそ放浪の乞食僧が経験する限りの屈辱と苦難を味わった。

三十六歳でこの放浪生活を打ち切った蕪村は、京に上ってここに居を定めた。一度、亡母の二十七回忌に、母の出身地である丹後の與謝に赴き、三年ほど滞在している。再び京へ戻った彼は四十五歳で還俗し、母の地に因んで與謝氏を名乗り、結婚して一女をもうけた。十年後、亡師の跡を継いで夜半亭宋阿二世を襲名した頃から、俳名とみに高まって門人も増え、画業における活動も負けず劣らず旺盛で、押しも押されもせぬ俳諧と文人画の大家として、京の俳壇に君臨する身となった。やがて、妻と娘によって初めて与えられた家族の団欒を大切に、平凡な市井の暮らしをこよなく愛する晩年の蕪村は、「桃源の路次の細かさよ冬ごもり」や、「うづみ火や我がかくれ家も雪の中」等に表されるような、〈出不精^{カザニユ}〉と呼ばれるほどの、^{こもりい}籠居の詩人の風貌を帯びるようになるのである。

さて、冒頭に挙げた句は、そのような家庭的安息を得て十数年後、五十九歳の時に詠まれたものである。これは「花いばら三句」と呼ばれる連作の逍遙詩の第一句で、蕪村はわずか三句のこの連作を、六十八歳の死の年までおよそ十年にわたって推敲し続けている。

花いばら三句

かの東臯にのぼれば

花いばら故郷の路に似たるかな

路たえて香にせまり咲くいばらかな

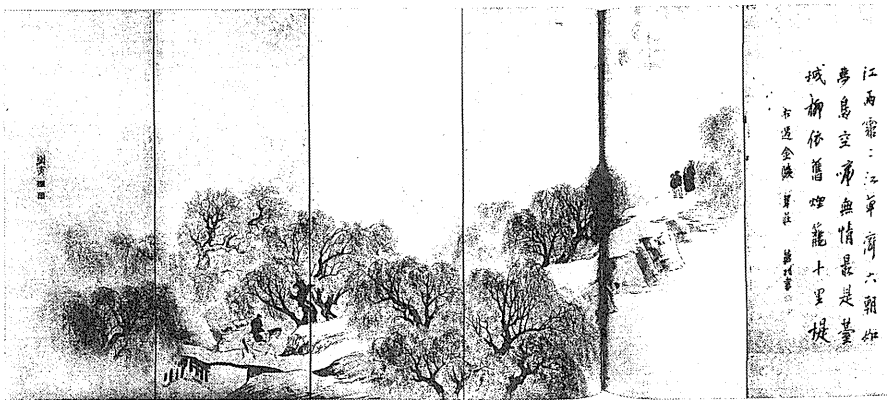
愁ひつつ岡にのぼれば花いばら

これらの句は、家庭の温もりに安住したように見えながらも、蕪村の心は、亡き父母を想って泣いた若き日の切ない郷愁を、未だに抱き続けて止まなかったことをもの語る。

〈東臯〉とは東の岡の意で、先にも觸れた陶淵明の「帰去来の辞」に“東臯ニ登レバ”とあるのを引用したもの。〈臯〉は高い岸のことであるから、川辺の岡ないしは堤に登るという意味にもなる。蕪村の故郷が摂津国の毛馬村であることも先に見たが、この村は淀川に沿った毛馬堤という長い土手を下ったところにあった。蕪村は同じ頃、「夜半樂三部曲」という故郷への道行の詩を作っていて、その第一部「春風馬堤曲」が、この毛馬堤を舞台にして母への思慕をうたった物語詩になっている。「花いばら三句」の〈東臯〉もまた、陶淵明の故郷になぞらえつつ、子供の頃よく遊んだという毛馬村の川堤への熱い望郷の想いを吐露したものであろう。路が絶えて、花いばらの芳香ばかりが堰き止められたかのごとく

重く立ちこめているという第二句や、愁いに閉ざされた心を抱いて川の土手を上ると、思いがけず、楚々たる白い花がやさしく咲き匂っていたという第三句から、故郷はつとに滅び帰るべき方もない哀しみがそくそくと胸に迫って来る。故郷は遠きにありて想うものとはよく言ったもので、蕪村の故郷ももはやこの世に存在しないからこそ、荒廃の凄艶な詩情を漂わせ、滅びの幻想的美しさをまとうて彼の眼裏に浮かび上るのだ。この世にあり得ないものを恋うるほどロマンティックな心情はない。現実の故郷を喪った者は心の中に故郷を追求め。しかし現実に存在しない故郷は、どれほど求めても行き着くことはできない。彼はそれ故に心の漂泊者となり、限らない郷愁を抱いてさまよい続ける。第三句の〈愁ひ〉はこのような永遠の漂泊人の悲哀であり、これらの逍遙詩が読む者の胸を打つのは、その悲哀が、可憐ないばらの花といういみじき形象を得て、比類なく美しい抒情性に高められているからにほかならない。

(英語)



竹林茅屋・柳陰騎路図屏風（六曲一双）與謝蕪村

James Pagel

Hi. My name is James Pagel, and I teach here at Kitasato University. If you look at the cover of this issue you will no doubt find me in the picture. Yes, I'm the one wearing a cap and no shirt. Be careful not to identify me as the gaijin because this photo was taken in Australia, so by Australian standards everyone in the photo is a foreigner.

This photo was taken while we cruised the Whitsunday Islands, which are located between Cairns and Brisbane, in an area known as the "Gold Coast." It was here in the spring of 1994 that I took a group of students sailing. (So you now know that I can do more than just teach English.) The trip was set up with the help of an old college friend by the name of Murray Spence, who is a yachtsman of some renown. We chose the Whitsundays as the venue for the sail because Murray now calls this neck of the woods home. After all, he is Australian and has the right to settle down anywhere he chooses. And he did pick a lovely spot, I must say.

You can see me here with my crew. Actually, there were 12 students with me, but five were on another yacht skippered by a real captain. Although I have a sailing license, it felt odd and a little frightening to captain a boat on my own for the first time in my limited sailing career. Being responsible for the boat and the welfare of a novice crew is a big job. Only two of my crew had any sailing experience, having had just completed a three-day course in which they learned how to raise and lower the sails. Raising and lowering the sails are important skills, but on the average the sails go up and down once a day. So the amount of help they could offer was limited. And sailing was only part of the day; after anchoring we still had to eat. Guess who wound up making most of the food? So by the end of each day I was more than a little weary.

But it was a great experience, one I would never give up. Look again at the cover. You can see how beautiful the Whitsundays are. The soft late-summer breezes are a sailor's delight, and the warm weather, the crystal blue waters, and fantastically beautiful coral formations make this vacation spot one of the greatest in the world. A little work and responsibility couldn't damper my enjoyment. And I know the students certainly had the time of their lives.

Each year I take a group of students sailing somewhere in the world. I've been to New Zealand, Australia, and the U.S. and Mexico. By the time you read this article I will have seen the America's Cup trials in San Diego with some students. I truly believe that spending time seeing a country by boat is a viable alternative to a "pack tour" in which someone visits five cities in the same number of days. I know more and more of you are thinking about travelling to foreign destinations. I am not pushing you to do it on a yacht, but I am telling you there are many ways for you to experience that big world out there. Don't leave it up to a tour agency to tell you where to go, when and what to eat and what omiyage to buy. Decide for yourself. Or with some friends.

When I look at the cover photo I know that I'll return to Australia to sail the Whitsundays again. The many memories sparkle and shine in my mind. The beauty of the experience floods my heart.

And how about you? What memories do you want to make for yourself?

(英語)

閲覧ニュース75号

1995. 4 発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里 1-15-1

発行責任者

手塚 甫

電話 (0427) 78-8005